

【残りの者】

[ロマ書講解・第38回]

『ローマ人への手紙』

11章1～10節

熊谷 徹

2015年1月18日

茅ヶ崎同盟教会礼拝説教

【序】残りモノには；

初めに頭の体操を一つ。「バーゲンセールで売れ残った洋服とかけて何と解く？」「日本の諺と解く」「その心は？」「残り物には服がある」…。つまらないダジャレである、ということはさておき、聖書に「**残りのもの**」という言葉が出て来る。今日はこの言葉が登場する『ローマ人への手紙』11章1～10節を学ぶ。

【1】パウロとユダヤ人問題；

(1)『ローマ人への手紙(ロマ書)』の著者パウロの最大関心事の一つが「同胞ユダヤ人の救い」である。「キリストを十字架につけて殺してしまったユダヤ人は救われるのか」という問題である。『ロマ書』は全部で16章あるが、この問題の為にパウロは第9章から第11章までを費やしている。実に『ロマ書』の5分の1、20%がユダヤ人問題を論じているのである。生粋のダヤ人である彼は「異邦人の使徒」として異邦人伝道に命を賭けたが、その彼の心を占領して離さなかった大問題があった。それがユダヤ人の救いであった。彼自身がユダヤ人だったからである。彼は自分についてこう述べている；「私は八日目に割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きっすいのヘブル人で律法についてはパリサイ人です。」(ピリピ 5:5)。「私はきっすいのヘブル人・生粋のユダヤ人である」という彼の言葉には、ユダヤ人であることへの誇りが込められている。その彼が心から願うのは、同胞ユダヤ人の救いであった。

(2)しかし、パウロのその願いとは裏腹に、パウロは同胞ユダヤ人から忌み嫌われたし、今も嫌われている。例えば、イスラエル共和国の初代首相ベン・グリオンは演説の中で、「キリスト教徒によるユダヤ人迫害とナチスによるユダヤ大虐殺を招いた張本人、それはパウロである」と言ってパウロを激しく非難し弾劾した。ベン・グリオンが言ったように、ユダヤ人は激しい迫害を受けた。シェークスピアは『ベニスの証人』でユダヤ人を愚弄嘲笑し、「金の亡者で冷血漢」というユダヤ人像を植え付けた。中世のカトリック教会は、「キリストを殺した憎むべき民族」としてユダヤ人を迫害し、十字軍はユダヤ人達を虐殺した。また、共産主義

者スターリンは反ユダヤ政策を取ってユダヤ人を迫害し、多数のユダヤ人を殺した。極めつけはヒトラーである。ヒトラーとナチスは、ユダヤ人を豚以下の存在とみなし、ユダヤ人皆殺しを目指して大虐殺・ホロコーストを行なった。そして現在ではイスラム教徒たちがユダヤ人と血生臭い戦いを繰り広げている。

(3) 歴史上、ユダヤ人ほど激しい迫害を受けた民族はない。しかし、ベン・グリオンが言ったこと、「ユダヤ大虐殺を招いた張本人、それはパウロである」という彼の主張は間違っている。そもそもパウロには、「キリストを十字架につけたユダヤ人は迫害されて当然だ」などという考えなど毛頭もない。むしろ、それとは逆にパウロは、「ユダヤ人は神に選ばれた選民であり神に救われるべき第一の民族である」と信じて疑わなかった。だからパウロはこう言った；「もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者(アナテマ)となることさえ願いたいのです。」(9:3)と。キリストについてはこう言った；「父祖たちも彼ら(ユダヤ人)のものです。またキリストも、人としては彼らから出られたのです。このキリストは万物の上であり、とこしえにほめたたえられる神です。アーメン。」(9:5)と。このキリストこそがユダヤ人の救い主なのだ、と彼は言うのである。

【2】神は見捨てない(ロマ書11:1)；

(1) 「同胞ユダヤ人が救われるためなら、この身が呪われた者・アナテマとなってもかまわない」とまで言ったパウロは、9章と10章で、ユダヤ人がキリストと福音を受け入れない理由について延々と論じて来た。それを一言で言えば、ユダヤ人が「人間の義、自分の行ないによる救いの道」に固執したからである。そのため、「神の義、キリストの十字架による救いの道」を受け入れることができないのである。延々とそのことを述べて来たパウロは、**第11章1節**でこう語る；「すると、神はご自分の民を退けてしまわれたのですか。絶対にそんなことはありません。」

(2)ユダヤ人は、神が遣わした救い主を「退け」、十字架につけて殺してしま
った。今度はユダヤ人が神から「退け」られ、裁かれる番となる筈である。だが、
「絶対にそんなことはありません」とパウロは言うのである。そう言い切れる根拠が
二つあった。一つは聖書がそう告げているからである。例えば、「まことに主は、
ご自分の偉大な御名のためにご自分の民を捨て去らない」(1サムエル12:22)とあ
り、「まことに主は、ご自分の民を見放さず、ご自分のものである民をお見捨て
になりません」(詩 94:14)とある。これらの聖句が告げるように、「神はご自分の
民ユダヤ人を決して見捨てない」というのがパウロの確信だった。

(3)もう一つの根拠は、パウロ自身が神の救いに与っているということである。そ
れが1節最後の言葉である;「この私もイスラエル人で、アブラハムの子孫に属し、
ベニヤミン族の出身です。」。

「ベニヤミン族」はユダヤ12部族の中でも名門の誉れ高い部族で、イスラエ
ルの初代の王サウルはベニヤミン族の出身だった。パウロのユダヤ名はこのサ
ウル王と同じくサウロである。また、イスラエル最大の預言者エレミヤもベニヤミン
族の出身であった。聖都エルサレムはベニヤミン族の領地にあり、そこに聖なる
神の宮が建てられたのだった。ユダヤ教において、ベニヤミン族こそは全イスラ
エルを代表する部族であり、イスラエル統一の要であり、失われた部族の回復
の望みだった。パウロは、「生粋のイスラエルでありしかもベニヤミン族の出身で
あるこの自分が神に救われ、神に召されて異邦人の使徒とされたということ、こ
の事実こそ、イスラエルは神に捨てられていないこと目に見える証拠である」と
言いたいのである。そして、2節後半でこう言うのである;「神は、あらかじめ知っ
ておられたご自分の民を退けてしまわれたのではありません。」。

【3】残された者(ロマ書11:2b~5);

(1)次にパウロは、ユダヤ人なら誰もが知っている預言者エリヤの話をする。紀
元前860年頃、預言者エリヤは、女王イゼベルが傾倒していた偶像バアル神
礼拝に強く反対した。そのため弾圧され命を狙われたエリヤはホレブ山に逃れ

た。ホレブ山でエリヤは、バアル礼拝に走ったイスラエルを神に訴えた。**3節**である；「主よ。彼らはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇をこわし、私だけが残されました。彼らはいま私のいのちを取ろうとしています。」。

このエリヤの訴えを聞いた神は、**4節**にあるように、「バアルにひざまずかなかった七千人を、わたしのために残しておいた。」と答えた。イスラエルの殆どの者がバアルに膝をかがめた。しかし、そのような中にあってもなお、イスラエルは神の民として存続している。数は僅か七千人にすぎない。少数ではあっても、七千という完全数の人々がイスラエルの信仰を守り通している、その七千人を通して神の栄光は顕されようとしている。彼らは神が「神のために残しておいた」神の精鋭なのである。

(2) パウロは**5節**でこう語る；「それと同じように、今も、恵みの選びによって残された者(leimma)がいます。」エリヤの時の精鋭七千人という存在が、パウロを初めとする少数のユダヤ人クリスチャンである。エリヤ時代の「残された者」七千人が霊的なイスラエルとなり、神の約束の担い手となった。それと同じように、今、キリストの教会の中にいるユダヤ人キリスト者たちが、イスラエルの「残りの者」として、神の救いの約束を担っている。その少数の「残りの者」を通して、イスラエルに対する神の救いの約束はいつか必ず実現される筈である…。これが、同胞イスラエルの救いに対するパウロの確信だった。

【4】恵みによって(ロマ書11:6~10)；

(1) 次の**6節**でパウロは5節で使った「恵み(kharis)」という言葉をも繰り返してこう語る；「もし恵みによるのであれば、もはや行ないによるものではありません。もしそうでなかったら、恵みが恵みでなくなります。」。

私が生れた1947年は聖書学に於いて記念すべき年である。その年、イスラエル南部の死海の西岸、クムランという場所の洞窟で聖書の写本が多数発見されたからである。20世紀最大の文献学的発見と言われる「死海写本」の発見

である。クムランでは、律法を守り厳格な宗教生活を送っている人達が共同生活を営んでいた。

数十年前、教会が全費用を出して私を1ヶ月に及ぶ聖地研修旅行に送り出してくれた。その旅行で私は死海のほとりにあるクムラン遺跡を訪れた。そこに立つとタイムスリップしたように二千年前のクムラン宗団の信仰生活を想像することができた。彼らは、旧約聖書が告げる「**残りの者**」とは自分達のことだと信じ、律法に忠実に生きていた。

だがパウロは、クムラン宗団やユダヤ教律法主義者たちのように「救いは人間の行ないによって得られるのだ」という考えを否定する。神の選びと救いは神の「恵みによる」のであって、律法を遵守するというような「行ないによるのではない」とパウロは言うのである。

(2) 結局、ユダヤ人の救いの問題とは、「救いは神の一方的な恵みによるのか、それとも人間の努力や行ないによるのか」というこの一点にかかっている。7節でパウロは「**イスラエルは追い求めていたものを獲得できませんでした。選ばれた者は獲得しましたが、他の者は、かたくなにされたのです。**」と言う。圧倒的多数のイスラエル人は「行ない」による救いを追い求めた結果、「**追い求めていたものを獲得できなかった**」。それに対し、少数の「**選ばれた者**」が恵みによる救いを「**獲得した**」。それ以外の大多数のユダヤ人は、福音に対して「**かたくなにされた**」。なぜか…。それは、彼らが「**律法による義**」にしがみついたからである。パウロはそのような「**かたくな**」なユダヤ人たちに、彼らが金科玉条としていた旧約聖書の言葉を投げかけて問いかける。それが、**8節から10節**である。

(3) 9節は解釈が分かれるが、「**食卓(trapeza)**」をユダヤ教の祭儀と解せば、ユダヤ人が福音に対してかたくなになっているのは、彼らの宗数的熱心さの故に他ならないという意味になる。律法と祭儀に対する努力そのものが、すなわち律法主義それ自体が、「**彼らにとって罫となり、網となり、躓きとなり、罰となつて**」、

キリストの福音を受け入れることを妨げているのである。

(4) 10節もその関連で読むと、ユダヤ人の「目がくらんで見えなくなっている」のは律法主義のせいである。また、「その背はいつまでもかがんでいる」のは、律法が重荷となつてのしかかっているからである。ユダヤ人を縛り付けているユダヤ教の縄目と律法主義という重荷から解放されない限り、ユダヤ人の救いは実現しないであろう。

そのユダヤ人の救いの実現のために、神に選ばれた者、少数の「残りの者」がいる。エリヤの時代の「バアルにひざをかかめなかつた七千人」に相当するのがキリストを信じ救われたクリスチャンでありパウロである。それらの「恵みの選びによって残された者」を用いて、神は救いの福音をユダヤ人に知らせようとされたのである。

【結び】内村鑑三の言葉；

パウロが今日の箇所ですべたことはユダヤ人の救いに関する問題である。それは二千年も後の我々日本人には何の関係もない問題に思える。だがそうではない。内村鑑三はここに日本人の救いに通じるものを見て取った。その内村鑑三の言葉に耳を傾けて見ると、極めて現代的な響きをもって今の我々に追つて来るのである。

内村鑑三は次のように言う(現代語に直して紹介する)；「わが日本民族についても、我らは同様のことを考える。日本人は民族全体としては福音を拒否している。日本人は自分の利害のことしか眼中になく、神の福音については無関心である。わが国は仏教国である。日本各地にある寺を見るが良い。死んだときに営まれる葬式を見るが良い。仏教の精神はもはや消失したとは言え、その形式はなおしっかりと日本人を捕えている。草と木が日本の全国土をおおうように、福音を信じない者は日本の全社会をおおっている。そして、表面的にはクリスチャンではあっても実はそうでない者、また、一度は信じたのにこれを捨てた人の数は甚だ多い。ひそかに恐れる、神はわが国を捨てたのではないだろうか。

しかしながらこうも思う、私のような頑なで罪深い者でさえ神の恵みに与ったではないか。そうであるならば、他の日本人が救われないという理由がどこにあるだろうか。また思うのである。少数の日本人はすでに神の招くところとなった。その数は少ないとは言え、これも日本人の一部である。日本人の一部が救われた以上は、その全部もついに救われるに違いない。これが、我らがパウロにならいてわが同胞について抱く希望である」(『ロマ書の研究』)。

日本のクリスチャンは「バアルにひざをかがめなかった七千人」に相当する。その数は圧倒的に少ない。最新のデータ(CIS 調査)では、日本のプロテスタントのクリスチャンの数は全人口の0.4パーセントに過ぎず、礼拝出席者数は僅か0.2パーセントに過ぎない。だが、これらの「残りの者」を通してこの国の人達の魂が救われる時が必ずやって来る。内村鑑三が言うように、「これが、我らがパウロにならいて、わが同胞について抱く希望」なのである。この希望を抱きつつ日本人同胞の救いの為に祈り続けて行かねばならない。そしてまた、パウロのようにユダヤ人の救いのためにも祈っていかねばならないのである。

最後に私はこう言いたい；「神に選ばれし《残りの者たち》よ。強くあれ、雄々しくあれ！ 誇り高くあれ！」と。◇